

---

# NARUTO ~ 一葉の忍者 ~

冬野 タキジ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NARUTO〜一葉の忍者〜

### 【Nコード】

N8612S

### 【作者名】

冬野 タキジ

### 【あらすじ】

晶遁という特殊なチャクラをもって生まれてきた紅蓮はその存在を恐れた両親に捨てられる。

そして他里に狙われないための措置として火影直々に晶遁の使用禁止令

が出されており扱う忍術は簡単な忍術と体術のみでアカデミーではおちこぼれだった。

しかし、そこへもう一人のおちこぼれだったオレンジ色のやんちゃな「ナルト」という少年と出会い。閉ざしていた心を開いていくので

ある。

アニメオリジナルストーリー限定で晶遁使いのキャラクター  
紅蓮の幼少期を木の葉の忍に置き換えた二次創作です。

この小説にはオリキャラ、独自解釈が存在します。  
それを了承の上でお願いします。

アドバイス、感想お待ちしています。

## 登場人物紹介

### 登場人物紹介

|||||主人公|||||

名前夕凧 ゆうなぎくれん 紅蓮

年齢9

性別女性

階級下忍

晶遁のという特殊なチャクラをもって生まれてきた子。

極めて稀な特異体質だったため迫害を恐れた両親は幼き紅蓮を捨て出て行ってしまう。

見つけた今の養父母が「夕凧 紅蓮」と名付けたのである。

特異体質を持つ忍は何かと他里からの標的になるため火影直々の命令で使用制限が出ていたためアカデミーでは体術に力を入れている。

### 第十一班メンバー

名前うちは ライガ

年齢7

性別男性

階級下忍

今は無きうちは一族の生き残りの一人。この歳写輪眼を開眼させアカデミーでは同じ一族出身の

サスケとトップを争うほどの実力の持ち主。サスケとは不仲・

名前鳶松 ソウマ

年齢9

性別男性

階級下忍

日々鍛錬を忘れない熱い情熱の持ち主。何事にも前向きで紅蓮たちをリードしている。

反面傷つきやすいところが玉にキズ。

〈 〈 〈 〈

担当上忍

名前白鷺 ヒナミ

年齢？？

性別女性

階級上忍

第十一班担当の先生。暗部からの配属となった。

普段は優しいが怒ると髪が立ち豹変するとの噂がある。得意忍術は火遁である。

## 登場人物紹介（後書き）

未熟物ですがよろしく願いします。

## 第一巻 2人の落ちこぼれ忍者

キンコンカンコン……

授業の始まりのチャイムがアカデミーの広い校庭に響き渡った。

だが、一人だけ授業をサボり用具倉庫の陰に隠れて落ち込んでいる一人のアカデミー生がいた。

少女の名は夕凧 紅蓮といった。表情はうつむいていて暗く、力無さそうに

もたれかかっている。紅蓮はすべてが嫌になっていた。

卒業試験まで後2ヶ月をきり最近は卒業試験への復習として今まで習ってきた術の

練習・・そして習得した技を駆使したアカデミー生同士の手合わせの授業が多くなってきた。

紅蓮は唯一得意な体術でも女の子ということもありどうしても男の子との力の差がはつきりして

いつも勝てずにいた。そして、友達など一人もいなかった。

紅蓮は晶遁のチャクラをもって生まれてきた特異体質であった。

だが、生まれたと同時に特異体質という事を知った実の両親は迫害されることを恐れ

幼き紅蓮を残し出て行ってしまったのである。

火影も特異体質の子は他里から狙われやすいためアカデミーに対し晶遁のチャクラは使わせぬよう

命令を下していた。これを破ると厳しい処罰が待っていたため体術と基本の術しか

習えなかったのである。

卒業間近となると優秀な子は火遁、水遁、風遁などの忍術を扱える子が一人、二人とでてくる。

その子達は飛び級であがって来た子達が多い。紅蓮にとってその子たちはうらやましかった。

〃 〃 〃 〃

さっきの時間でも私は一人だけ分身の術ができなくて大恥をかいってしまった。

周りの笑っている子達が憎い・・・。

私だってみんなと同じに忍術を使いたいの・・・周りの大人達は私には教えようとしない。

ねえ、なんで神様は私をこんな風に生んでしまったの??? 晶遁なんかなければ・・・

ただただ自分を恨むだけであつた。そう思うとこみ上げてくるものがありまたうつむいた。

どこから、ともなく足音が聞こえてきた。どうせ私を探しているイルカ先生に違いない。。

なんともないように気にしないでいたが、だんだんその足音が早くなってきた。

そして、私の前にとまった。どうせまた怒られるんだ。

だが、聞こえてきたのはいつものイルカ先生の声ではなくでかくやんちゃな声だった。

「なあなあ、そこで何してんだってばよ！」

聞きなれない声にハッと私は顔を上げた。

視界に入ってきた子はオレンジがかった黄色い髪をしていて額にはゴーグルをつけている



見慣れない男の子だった。

「あなた・・・誰？」

思わず聞いてしまった。

「俺の名前はうずまきナルト！！将来火影になる男だってばよ。ところでお前そこに座って何してんだ？」

ナルト！？聞いたことない名前だ。確か隣のクラスのそのような名前の男の子がいたはずだが  
うろ覚えだった。

「ちよつと考え事してただけよ。あなたこそ授業サボってなにしてるの??」

今度は私が逆に聞いてみた。ナルトは顔をひきつらせた。

「だって授業うけてたってつまんねーもん。俺みんなについてけねーしさ・・・」

その声には私と同じ暗い思いが縮こまっていた。

「そつか・・・私もだよ。どうせみんなの前で恥かくだけだし。」

「ぬおっ！お前もか！！じゃあさじゃあさ先生から隠れられる場所しってるから一緒にこない？」

怒られるのやだろ？」

またもや明るくなった。感情の移り変わりが激しい子らしいが・・・  
怒られてまた呼び出し食らうよりはマシと考えナルトのいう言葉に  
同調した。

「いいよ。案内して。」

「んじゃ、決まりだ！ついてこい！」

そういつてナルトはいい終わるなり私のことなんてかまわず走り出

した。

「ちょっと、待ってよお!!」

私の声も彼には届かずナルトはなりふり構わない。

「早くこい！先生にみつかるってばよ。」

その言葉に挑発されて私は走る速度をあげた。だけどまだナルトには追いつかない。

やがて、ナルトは走るのをやめ私の方を向いて笑ってきた。

私は最後の力を振り絞ってナルトのところまでいった。笑顔が憎たらしかったが。

「ここが俺の隠れ家だってばよ！ここなら先生にもみつきりづらいし秘密の特訓もできるしな！」

私が連れてこられたナルトの隠れ家はアカデミー校舎の裏に広がる雑木林の開けた場所で

周りは木々に囲まれた隠れ家にはうってつけの場所であつた。

「そっぴや、お前の名前聞いてなかったな。なんていうんだ？」  
ナルトは目を大きくさせていつてきた。

「そっぴえば、まだだつたわね。私はBクラスの夕風 紅蓮。」

「紅蓮か・・・お前良い名前してんな!!」

驚いた。私の名前を良いだなんて言ってくれる人初めてだ。

この子・・・変わってるけどいいところもあるんだ。

「ありがとうね」と口には出せなかったが心の中でそう思った。

この出会いから私のアカデミーでの生活は変わっていくことになる。



## 第一巻 2人の落ちこぼれ忍者（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

まだ文章、文字が乱雑で読みにくいところも多々あると思います。  
未熟者ですがよろしくお願いします。

## 第二卷 2人の秘密

倉庫の裏で出会ったナルトという少年に連れられて  
今私はナルトのいう通称『隠れ家』にいる。

木々の隙間から吹いてくるそよ風が気持ちよく、葉の間からもれる  
木漏れ日がちょうどよくあたっていてなんと幻想的な風景を演出  
している。

それにしても、なんでこんなところナルトは知っていたのかと思い  
唐突にナルトに質問してみた。

「ナルト君、なんでこんな所知ってたの？私今までこのアカデミー  
にこんな安らげる場所  
あるなんて知らなかった。」

アカデミーの敷地は広くて校舎を挟み表に広い校庭を持ち裏にまた  
広い雑木林をもっていて  
周りの住宅地とは大きな柵によって区切られている。

「俺ってばさ何回も授業サボってるからアカデミーの敷地内のなら  
どこでもいったんだ。  
んでもって、ここを見つけたってこと。」

「なるほどね……。でもさそんなに授業サボっていると卒業できない  
わよ。私だってそんなにサボってる  
訳じゃないけど、こんな窮屈な場所早く卒業したいしさ。」

私が言い終えたたんナルトは顔つきを悪くした。  
今さっきいったことの中にナルトを傷つける言葉なんてあっただろ

うか・

「俺なんかどうせまた卒業できないからいいんだってばよ。」

卒業できない！？それはどういうことだろうか・・・

「なんで？早く卒業して下忍になって認めてもらおうとは思わないの？」

ナルトはいきなり私の方を向いてすごい剣幕でいつてきた。

「誰も俺のことなんてはなっから認めてなんかいいえ！！俺だってみんなに認めてもらいたくて

努力したけど全然だめだった。。。こいつのせいで俺ばっか避けられるんだってばよ！！」

「こいつって・・・何？」

「この訳のわからねえ。封印のせいだ！！」

ナルトはそういうとお腹に刻まれている封印をみせてきた。

私はそれを何がなんだか分からぬまま目をこらしてみた。

「俺の中に封印してある九尾とかいうやつでみんな俺のこと避けてやがんだ！

バケモノよばわりしやがって・・・俺ってば何もしてないのに・・・どうせお前だって

俺のことなんてどーでもって思ってたんだろ？」

ナルトはそういうと涙を流していた。

九尾の言葉を聴いたとたん・・・私の脳裏をよぎった。

そうだ・・・この子九尾の人柱力のナルトってこの子だったのね。この子も生まれつきの能力で苦しんでたなんて。

「まって・・・それは違うわ。私もナルト君と同じなの。」

「お・同じだって？嘘つけそうやって同情をよそって裏切るつもりだな？？」

ナルトは今までの負の経験で人を信じられなくなっているようだ。

「本当にホントなの・・・だって私もー」

晶遁の事はもちろん口外無用とされている。私の心の中で闇と光が  
うずまいた。

だけど迷ってる場合ではなかった。私はどうなっただっていい・・・

ただ同じ境遇の子を救いたい気持ちが私を動かした。

火影のじいさま・・・すいません。

「なんだってばよ？」

「ナルト君と同じ、特異体質で生まれてきてしまったの。私だって  
周りの大人達から

本当の自分を見てもえなかったから。ナルト君の気持ち痛いほど  
分かる。」

それをきいて・・・ナルトは少し驚愕した表情を浮かべていた。

それもそのハズだろう、私自身のことなんてこれまで一回も話した  
ことなんてないから。

「私ね。晶遁っていう特殊チャクラを持ってるの。だけど百眼や写  
輪眼のような血継限界みたいに

他里から狙われないようにって晶遁のチャクラの使用を制限させて  
きたの。だから体術だけしか

ないからだんだんとみんなにおいてけぼりにされて友達なんてい  
なかったの。

だからね。ナルト君を助けたいんだ。」

今話せることすべてを打ち明かした。それを聞いたナルトが

「お・お前もだったのか・。俺ってば今まで一人だけって思ってたけど。同じ思いを

してきた奴がいるなんて・。俺自身が間違ってたばよ。」

「だから、お願い。友達になってくれる？」

私は目から出て来る涙を拭っていった。

ナルトはまたあの元気いっぱいの笑顔をみせてくれた。

「もちろんだ！！もうお互いのことが分かり合えた時から俺たち友達だ！」

そして私の口は無意識のうちに

「あ・ありがとう！！！」

といていた。唯一伝えられなかった言葉がでた。いつのまにか涙は嬉し涙に変わっていた。

「バーか！泣いてるなよ！！」

笑いながらいつてきた。

その時うしろからイルカ先生の怒号が聞こえてきた。

「こらあ！お前達そこで何してんだあ！！戻ってこい。」

「ヤベツ！見つかった！紅蓮逃げろってばよ！」



「了解。」

その日初めて私に友達ができた。名前は「ナルト」

### 第三卷 卒業試験前編（前書き）

まず、読者の皆様更新が遅れてしまって申し訳ありません。

模試、中間とテスト続きでパソコンにも触れない日々が続いてしま  
いました・・・。

更新頻度は一週間に1、2度程度になります但今後ともよろしくお  
願いします。

### 第三卷 卒業試験前編

あの日ナルトと出会ってから時間は刻一刻とながれていつてもう二ヶ月が経とうとしている。

隠れ家でナルト君に出会って以来私達は卒業という事を自覚して授業をサボることはなくなったし

そして何より放課後に2人だけの秘密の特訓ってやつをやってきたんだ。

最初はタイヤ引きとかごく一般的なものだけどいつもは怒ってばかりいるイルカ先生も  
気を掛けてくださって「補習」ってことで特訓に付き合ってくれた。

そのおかげか前よりもパワーもまして体術は男の子にもひけをとらないくらいになったし

ナルト君と私が一番苦手だった『分身の術』もイルカ先生が丁寧に教えてくれて

なんとか卒業試験前までにはマスターできるようになった。

だけど何よりも一番の思い出は特訓の後にイルカ先生のおごりで行った。

ラーメン一樂で3人で笑いあって食べたラーメンかな・・・？

そしていよいよ運命の卒業試験の日がやって来た。

今私は卒業試験会場の控え室にいる。Aクラスの子達が今やっていてまもなく私たちの番という事だ。

一人づつ試験が行われる教室にいつてうまくできればその場で忍びの証となる

木の葉のマークが刻まれた額あてがもらえる。

今年の試験は例年と同じく分身の術であった。私達も特訓のおかげでマスターしているから

自信はある。だけど落ちたらどうしよっ・・・っていう不安もあるから

心臓はさつきからバクバクで緊張の真っ只中だ。ナルト君はCクラスだったから

私が最初に結果を出さないといけない。

そうやっている間も時間はながれていき・・・

ガララ・・・ふいに控え室のドアがあき試験監督の先生が私の名前を呼ぶ。

「次！夕風 紅蓮。」

「は・・・ハイッ」

緊張のせいか声が裏返ってしまった。だけど恐れることなんてなんでもなかった。

そして、私は試験が行われる教室へと入った。

そこには審査役のイルカ先生ともう一人ミズキ先生がいた。深い沈黙が漂っていた。

「夕風 紅蓮。これより試験を開始する。はじめ！」

イルカ先生のどでかい声が教室にこだました。

それと同時に私は目をつむってチャクラを集中させて印を結び始める・・・

今までやってきた事を信じればいいんだ。

### 第三卷 卒業試験前編（後書き）

本当は一気に書き上げたかったのですが時間の都合により  
ここまでです。。。

中途半端なところで申し訳ございません。近日中には卒業試験を  
完成させます。。。

卒業シーンは原作とは少し異なりオリジナル観点にします。

#### 第四卷 卒業試験後編（前書き）

やはり完結させないで終わりにするのはどこかもどかかったので  
すぐ更新することにしました。。。

とここで一つ思ったことなのですが・アカデミーの分身の術は補助忍術だが

実際に忍術になると「水晶分身」になるのか・・・。

といっても作者はまったくの無知なのでwiki参照になってしまう  
悲しいものです。



た。

これからも抜かりなく頑張るように。」

この言葉を聴いた途端。私の心の闇が一瞬にして晴れた気がした。

「ほ・・ホントですか？」

まだ目の前に起こっていることが理解できない私は聞き返してしま  
った。

「ああ。これが合格の証の額あてだ。」

イルカ先生は机にきちんと並べてあった憧れだった額あてを私の手  
にしっかりと渡してくれたんだ。

それと同時に私は本当に合格を確信したのである。まぎれもなく私  
の掌にあるのは額あてだ。

いつきに今までの気持ちが弾けた。

「あ・・ありがとうございます。」みんな笑っている。そして私の  
顔も自然と笑みになっていた。

努力は裏切らなかった。

時間も昼に差し掛かった頃すべての試験が終わった。

今アカデミー前の運動場には卒業を喜ぶ子供とお母さんでいっぱい  
であった。

「俺、お父さんみたいな忍になるよ!!」

「さすが、私の子だわ。」



所々から感嘆の声が聞こえてくる。だが私はその中にはいなかった。記憶は残ってないけど幼い頃に実の両親に捨てられて今のお母さん、お父さんすなわち養父母に育てられているけどただでさえ貧乏な家だから畑仕事でこられないのである。

生きていくためには仕方のないことだ。

でも一人だけ卒業という喜ばしいことを祝ってもらえないのも寂しかった。

しばらく木にもたれかかってあたりを見回していると見覚えのある人影が見えた。

黄色の頭にオレンジ色の服まぎれもなくその人はナルトであった。

ナルトは私を探しているようだった。無論彼にも両親はいない。

「ナルト君！こっちこっち！！」

私の声に気づいたのかナルト君は私を見つけるとすぐさまよつてきた。

その手にはしっかりと額あてが握られていた。ナルト君も無事合格できたんだ。

「紅蓮。お前も合格できたのか！」

「ええ。ナルト君も無事合格できたんだね。」

「特訓の成果とイルカ先生の教えが役立つたってばよ！これで俺も忍び認めてもらえたんだ。」

「でも。本当に厳しいのはこれからよね。」

「そんなこと昔から分かってるってばよ！俺の情熱は誰にでも負けねえからな。」

「そうね。私も負けられない。お互い頑張りましょう」

「うん！アカデミーで教わったことは忘れないってばよ。」

私達は心の底から笑いあって互いの合格を祝福した。同じ境遇同士で心の内を分かりあった仲なのだから喜びは倍であった。そしてナルト君は拳を強く掲げ

「んで持って火影になってやるってばよ！！！」

## 第五卷 すべての始まり

私とナルト君は無事卒業試験を終えて無事アカデミーを卒業することができて

こうして今、説明会の会場にいるわけだ。

下忍となった喜びとこれから待ち受ける忍としての生活に不安を抱えながら出発である。

周りみんなこれからのことなんかなりふり構わず友達とのおしゃべりに没頭しており

無邪気に笑いあっている。

私だけこんなに緊張していいのだろうか？なんて思いつつ唯一親友と呼べる人

ナルト君はというとさっきからピンク色の髪をした女の子に夢中である。

名は確か春野サクラといったか・・・何もナルトと同じクラスだったらしいが私には

面識がない。そしてそのサクラを挟んで紺色の淡い服にうちは一族のマークをきいている

すごいフレッシュな男の子・・・そう今年ルーキーとして里中に名を馳せている

うちはサスケである。

あの歳で既に写輪眼を開眼させておりアカデミーでの成績はNo.1ドベだった私達からすれば憧れの存在でもある。

さっきから何やらサクラに猛烈アピールをしているナルト君である

が彼女はさつきからサスケの方ばかり向いている。

アカデミーNo.1でしかもルックスもいいから女の子達からはモテモテらしいが私のタイプではないなあ・・・

そして一番見たくないシーンを私は目にしてしまった。

それはサスケを不快に思ったのかナルト君は机の上ののっていた時だった。

しばらく間近で睨み合っていたまではよかったが突然後ろの生徒が故意ではなさそうだが

ナルト君の背中に手をあててしまってナルト君は押し出されるサスケの唇へストライク・・・

そうキスを見てしまったのである。しかも女の子達の前で・・・

一瞬私も目をふさいでしまった。だが目の前には取り返しのできない光景。。。

そしてナルト君は女の子達によってフルボッコにされてしまったのはいうまでもない。

と不安な気を紛らわせつつしていると教室のドアが開きアカデミーの先生のイルカ先生を筆頭に

今期生の担当上忍となる先生方がズラリと入ってきた。一瞬にして賑やかだった教室が

静まりかえった。

その先生達の中で一際視線を集めている人といえば額あてで左目を隠している銀髪の先生。

名前は分からないがとにかく異様なスタイルで奇抜なヘア―は目が  
いつてしまう。

そんな中でイルカ先生が教壇の中央にたつて喋り始めた

「今日から君達は、めでたく一人前の忍者となったわけだが・・し  
かしまだまだ新米の下忍  
本当に大変なのはこれからだ。」

まず、そういい終えると私は・・いやほとんどの人が息をのんだ。  
つづけざまにイルカ先生が

「えー・・・これからの君達には里から任務が与えられるわけだが  
今後は三人一組スリーマンセル

の班を作り各班ごとに一人づつ担当の上忍の先生がつきその先生の  
指導のもと任務をこなしていくことになる」

忍びの世界とはアカデミーとは全然違う里のために任務をこなし死  
亡率も格段と高くなる

厳しい世界なのだ。一歩間違えば全滅という最悪の事態にもなり  
かねないのである。

そう、ここからはもう年齢なんて関係のない。。。

そんな不安を脳裏に抱かせながら私達はそれぞれのスタートライン  
へといくのである。

三人一組か・・誰といたい私はなるのだろうか。

「班は力のバランスが均等となるようこちらで決めておいた。」

エーーーーー！

とどよめきが生徒達の間でまきおこったがそんなことはお構いなし

にイルカ先生は発表を始めた・

「まず第一班　まかどホルマ、倉内ソウビン……」

と段々と発表のたびに歓声やどんよりとした声が響きあうなか・

「つじや次七班！うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ！」  
いい終えたとたんナルト君が立ち上がって

「イルカ先生！！よりによって優秀な俺が何でこんなやつと同じ班  
なんだってばよ！！」

文句を言い始めたのだ。

でも、ナルト君きみは私と同じドベだよ……。相手はしかもN.O.  
1ルーキー……

あなたが言える立場じゃと私が思ったとうりのことをイルカ先生は  
言った。

「サスケは卒業生36人中一番の成績で卒業、ナルトお前は男子の  
中で一番のドベ！いいか！

班の力を均等にするとしげくんとこうなるんだよ！」

この言葉に呼応してサスケも

「まつせいぜい俺の足手まといになるなよ。ドベ！」

ナルト君もさすがに頭にきたのか・

とつくみ合いの喧嘩になってしまった。

つじやあ女で一番のドベな私は優秀な生徒と！？

これはマズイ……。という新たな不安をかきたてた。

イルカ先生は見向きもせずさらに続けていく。

「次、第十一班！うちはライガ、鳶松ソウマ、夕凧紅蓮。」

うちはライガだって！？この子もまたサスケ君と同じうちは一族の出身で惜しくも成績はNo.2であるが優秀には変わりない。そして写輪眼を同じく開眼させている。

これもドベな私といれてのパワーバランスを考えたら計算はあうが。

そして鳶松ソウマに関してはまったくの無知である。どんな子なのか・・・

周りを見回すとライガはすぐに気がついた。サスケと同じ後ろにうちのはマークが入った服を着ている。

微動だにせずただじっとしていた。第一印象としておとなしい。ケドどこかに隠し持っている威厳・・・

鳶松ソウマはどこにいるのか分からなかった。

「以上十二班！終了！」

「っじゃみんな午後から上忍の先生を紹介するからそれまで解散！  
！！」

といって先生達は出て行ってしまった。

ナルト君に声をかけたかったけど収まりそうにないので一人呆然と私は教室を後にした。

先走る不安を胸に・・・

## 第五卷 すべての始まり（後書き）

やっと・・・登場人物紹介であった鳶松ソウマ、うちはライガの二名を

出せました！またせてしまつてすいません。

ナルトとの関係は少し減つていてしまいましたが・・・  
白鷺ヒナミについては次号に登場します。

皆さんこれからもよろしく願います。



## 第六卷 担当上忍 白鷺ヒナミ（前書き）

やっと今回最後の主要人物ヒナミを登場させることができました。

読者の皆様遅くなって本当にすいません。

## 第六卷 担当上忍 白鷺ヒナミ

アカデミー校内 資料室にて

2人の男女が何やら資料を見て話し合っていた。

「これが今回お前が担当する忍者達だ。初めて担当するヒナミには結構厳しい面々だな・・・」

男は資料を隣のヒナミに手渡した。

「ああ、ありがとうございます。シンドウ先輩早速見させていただきます。」

「だから、もうここで先輩はやめろってもう俺達は同じ先生なんだからなっ」

「でも何か昔の名残っていうか癖でそう呼んでしまっんです。」

とヒナミは顔を赤裸々にしていった。この状況でシンドウと目線を合わせるのは

アレだったので手元の資料に目を傾けた。

その資料にはヒナミの担当する3人の忍び名前と顔写真やアカデミーからの

情報がのっていた。忍び登録書とは違った別の重要参考書であった。

忍びの名前は上から順にうちはライガ、鳶松ソウマ、夕凧紅蓮とあった。

「うちの写輪眼に熱血馬鹿そして晶遁のこの子ですか・・・」

「個性あふれるメンツが揃っちゃったな。まあ暗部でも成績優秀なお前なら

やっていけると火影様は判断したんだろ。期待に応えろよ。」

「分かってますって。何かおこしたらすぐ罰直食らうの私ですし」

「その様子ならなんとかやっていけそうだな。それよりあの事も火影様から聞いてるんだろうな？」

「はい。特に夕凧 紅蓮って子のことは里の機密ですし常に警戒します。それとうちはの方も・・・」

「特に狙われやすい要素満載だからな。遠くの任務には十分気を付けるよ。」

「つじや俺も行かなきゃなんねえしこれでドロン！」

「お疲れ様です。」

ヒナミも資料を手に自分の受け持つ部屋へと歩きはじめた。

ヒナミ side and

紅蓮 side

お昼を過ぎ担当上忍が始まるうとしていた。

卒業生達は各班に設けられた控え室へとそれぞれ向かっていた。

その中に紅蓮もいた。ナルトとは食事を共にして互いに愚痴をこぼしあっていた。

ナルトから聞いた愚痴の中心はサスケのことばっかである。

「あいつ何なんだってばよ！いきなりあの態度・・・」  
などなど悪態をついていた。

そして互いの健闘を祈って別れた。二人ともしばらく会えなくなることは二人とも分かっていたが、口にはしなかった。

広い廊下の右左にはそれぞれ暖簾に第一班から第十二班までそれぞれに控え室が設けられていた。

第十一班の部屋は一番奥の端の部屋であった。大きく第十一班控え室と書いてあったので分かりやすかった。

扉に近づいてくるたび心臓がバクバクとなってくる。  
ドアノブに手をかける前に今一度深呼吸をした。

だが逆に心拍は増えていくばかり・・・  
「何やってんだ自分！」と己を諭し勢いに身をまかせて勢いよくドアを開けた。

まぶしい光が私の目に入ってきた。一瞬目を閉じた。。

だがすぐに開けなおすと・・・そこには既に二人の男の子が座っていた。  
た。

一人はうちのマークが入った紺色の服をきている男の子・・・  
そう紛れもないその子はうちはライガであった。

そして手前には炎をイメージした赤色の服を着た男の子  
鳶松ソウマである。

初めてこのとき私達は目を合わせた。

一番最初に声をかけてきてくれたのは鳶松ソウマであった。

「あなたは、夕凧紅蓮さんですね。僕は鳶松ソウマです。これから  
よろしく願います!。」  
といかにも熱血そうな感じで言ってきた。(ロック・リーみたいな  
感じ?)

「よ・・よろしく。」

そのあまりの迫力に空返事しかできなかった。

「そして、こっちの彼がアカデミーでも知れわたっていたうちはラ  
イガ君です。」

いかにも内気なライガを催促するようにソウマが紹介した。

「よろしくな。」

彼の顔には笑顔なんてなく真顔でそう短くつけ沿えただけだった。  
サスケはまだ親しげがあったが

彼は周りとの交流を拒んでいるかのような雰囲気だった。

その後暫く沈黙が流れたが場の雰囲気のを和ませてくれたのはやはり  
ソウマだった。

「皆さんはそれぞれクラスも違いますし今日はじめてあったばかり  
ですが、これから

共に任務をこなしていく仲間でもあります。だから少しでもお互い

を事を知り合えるよう  
自己紹介をしませんか？」

誰も異論はなかった。

「っじゃ俺からで・・名前は鳶松ソウマと申します。得意な忍術は土遁です。

好きなことは修行です。苦手はありません！」

好きなものが修行って・・コヤツあのロック・リーってやつと一緒になんだね。

まあ少し暑苦しいけどまだ爽やかさがあるからいいんだけど・・

「っじゃ次は私がするね。名前は夕風 紅蓮。得意なのは体術です。一般的な重拳なんだけど・・

好きなことってというか好きな言葉は『努力』苦手なのは忍術です。」

自分が晶遁という特異体質であることはここでは避けておこう。後で面倒なことになりかねないし・・

まあ、いつかは打ち明けなくてはならない時がくるのは承知すみだ。それもDランク任務の間はいいがいつかは絶対使ってしまうだろう。身を危険に晒してしまうけど・・体術だけで生きていける世界ではないし。

最後によりやくスキんシップが苦手そうで内気な印象を漂わせているライガが

重い口をあけたようだ。

「俺の名はうちはライガ、得意なのはうちのは名のごとく火遁だ。好きなものとか苦手なものとか特にナシ。以上だ。」

うむ。予想以上に自分のことは語りたがらないようだ。  
同じ一族のサスケとはエライ違いだな。。。

両方近づけないオーラをバリバリ放ってるのは同じなんだけどね。  
一通り自己紹介が終わったって事で場を取仕切ったのはやはりソウマだった。

「少しはお互いのことが分かりあえましたね。。とはいってもこれからやっていく仲間ですから。  
あとは修行やなにかでサポートしあいましょう。」

「ああ。」

「はい。」

これからやっていくにしてもまだ初めてあったばかりだから付け加えられることは何もない。

ソウマ以外は・・・

それから感嘆にお互いのアカデミー時でのことに話しあっていた時ふいにドアノブが動いたかと思うとそこには明らかにこれから私達を担当する上忍らしき人物が入ってきた。

黒色の髪に少し茶色がかった長い髪を垂らしており、目は青色身は木の葉ベストをまとっている  
穏やかそうな女の先生であった。

「みんな、遅くなってごめん。私がこれからあなた達を担当する白鷺ヒナミっています。

まだ、担当するのは今年が始めてだから不便なところもあるけどよ

ろしくね。」

「ハイ。」

ライガもさすがに声を張り上げていた。3人の呼吸がうまく合わさっていた、

「次にみんなに自己紹介してもらいたいんだけど・・・案内したい場所があるので

そこですましよう。みんなついてきて。」

私達一行はとある場所へと向かった。



第六卷 担当上忍 白鷺ヒナミ（後書き）

何回も改変すいません。。

書き上げてしまったかったところなので・・・

読みにくくて申し訳ないです。

## 第七巻 始動！第十一班

私達が案内された場所はアカデミー時代にも使っていた演習場であった。

何故、先生がここを選んだかは後々分かることとなった。

「まあ、あなた達の名前はもう知らされてあるんだけど今日初めて会ったばかりって

ことには変わりないし左の紅蓮さんから自己紹介してください。得意なこと好きなこと将来の夢とかなんでもいいのでどうぞ。」

い・・いきなり私！？自己紹介さつき3人の間でやり終えたばかりだけど。。。

先生相手とばると別の違和感が生まれてくるのは何故なんだろうか・・

「あ・・えーと名前は夕凧 紅蓮といます。好きな・・。」

言葉は『努力』なんて先生の前でなんかいえない。熱血と同じようにされるのは嫌だから。

努力＝修行って解釈されそうだし・・

「好きなじゃなくて得意なのは重拳式体術です。将来の夢はいい忍びになることです。

よろしくお願いします。」

ふう・・なんとか言い終えた。第一印象はこんなもんでいいだろう。「紅蓮さんありがとう。次はお隣のソウマ君どうぞ。」

「ハイっ！！！！名前は鳶松ソウマです。得意なのはお父さんと同じ

土遁です。

好きなものは修行！！苦手なものはありません。将来の夢はお父さんを超越することです。」

驚いた……。熱血だけじゃなくかなりのお父さん好きなのね。ってことは熱血もお父さん譲りと・・

うわあ・・まるつきりロック・リーとマイト・ガイ先生みたいでただ師弟同士と親子が違っただけで中身は同じようなもんですね分かります。

「あなたのお父さんの鳶松ナリマさんは木の葉でも有名な土遁使いですもんね。

お父さんによく似てますね。」

なんていうもんだからソウマは照れ顔である。

うん、やっぱ暑苦しいぞお前えくくく！

「っじゃ次ライガ君お願いします。」

「名前はうちはライガ。嫌いなこと好きなことは無い。昔は一族の再興であつたが

今は伝統あるうちはの血を絶やさない事だ。一族を滅ぼしたアイツを許せないが

サスケみたいに殺そうなんておもっちゃいねえ。サスケとは違うそれだけだ。」

今まで私の中にいたライガ像をいつきに打ち壊すものだった。

うちはが滅んだことには知っていたがまだライガやサスケという生き残りがいる限り

血筋は絶えていない・・。

内気な像から少し明るみと暗闇がまじった複雑な像へと変っていた。流石にヒナミもこの自己紹介に口を挟まなかった。逆に誰もそのことには触れたくないような空気でもあった。

「ありがとう。これで全員の自己紹介が終わったわね。ってことで・」

「いきなり明日からあなた達には任務をやってもらう」

すかさずその言葉にソウマが食らいつく。  
早く任務がしたくてたまらないようだ。

「早速依頼されてる任務するんですか??？」

「そんな訳ないわよ。明日あなた達にやってもらうのはサバイバル演習。」

「サ・・サバイバル演習ですか？」

演習なんてアカデミーでもたくさんやってきた。やっとの思いで卒業してきたのにまたかよっ！  
って最初私は軽視してしまった。

「アカデミーでやってるただの演習ではないのよ。みんな忍びになれたからって浮かれていますけど  
それは違う・・・。この演習を突破して初めて下忍として認められるの。」

アカデミーでの卒業試験はこの演習にふさわしいものを選抜するた

めのただの中間点。

今年卒業した36人からなる第十二班のうち合格できるのはわずか三分の一の四班だけ。

そう下忍として認められるのは12人。あとは再びアカデミーへ戻ってもらうことになる。」

な・・なんだって！？落ちたらまだアカデミーに戻る。しかも合格率は極端に少ないうえに・・

忍びとしてまだ一人前ではなかったなんて。。一瞬今までやってきたことすべてを疑った。

あれもこれもすべてこの演習のために・・

嫌だ。そんなの絶対！この関門は突破しないといけない。また苦しむのはお断りだ。

ライガは以前表情は変えなかったがソウマはこれでもか・・というくらい落ち込んでいた。

「何落ち込んでんの。まだ終わってないじゃない。私もあなた達を合格させてあげたいのは

ヤマヤマなんだけどコレも厳しい忍びの世界を生き抜いていくために必要な試験だから。

と。。とにかく明日の朝またこの演習場前に集合ね。相手はモチロ  
ン担当上忍の私

実力も見える機会だから持てる忍具は一式揃えてきてね。朝飯は抜いてきたほうがいいわよ。

このプリントにすべて書いておいたから遅れないように。」

ヒナミから配られたプリントにはサバイバル演習に関する項目がズラリとならんでいた。

ソウマは配られた途端熱心に読み始め私も目を通していたがライガ

だけは違った。

手に取った途端ぐしゃぐしゃにしてしまったのである。

「ら・ライガ君大丈夫なの？」

流石に心配になってヒナミがいったが彼は

「問題ないです・」とだけ受け答えした。

「っじゃ解散！」

突きつけられた現実には重かった。

## 第八巻 サバイバル演習その1

翌朝・・・

今日は大事な試験・そう忍びになれるかを賭けたサバイバル演習が始まるうとしていた。

私は予定時刻より30分前に指定された第5演習場へ入った。

今日は他の班でもサバイバル演習があるのか見覚えのある人たちにも何度かあった。

みんなの顔は極度の緊張からなのかひきつっていたし言葉すくなだった。

私がついた頃には既に第5演習場には既にソウマ、ライガの2人がいた。

「あつ！おはようございます。紅蓮さん」

「おはよう。後私のことは紅蓮でいいから。だって呼び捨てにしてもらった方が

気を使わなくてすむから」

我先にとソウマが話しかけてきてくれた。ソウマのポシエットには忍具となるクナイや手裏剣がビシッと揃っていた。

私もできる限り忍具はそろえてきたつもりだ。

ライガもあのポシエットの膨らみからするとそろえてきていたようだった。

「やっぱり、緊張しますね。」

「アカデミーの時の緊張何かへでもないくらいに思ってきたよ。」

今思うとアカデミーの時の緊張は無駄に思えてならなかった。

「ライガは？」

「俺は大丈夫だ。それより自分達の心配したらどうなんだ？」

相変わらずの俺様主義者である。まっそれもライガらしくていいんだけど・・

私は昨日配られたプリントをもう一度読み返してみた。

そこには日時、場所、用意するものだけが書いてあって具体的な演習内容に関しては記されてなかったのである。

「こういう演習なのか分からないから余計に難しく思うわね。」  
その言葉にソウマが反応した。

「そうですね。僕も訳が分からなくなってお父さんに聞いてみたんですが・・生憎担当上忍び未経験なので分からないそうです。だけど年によって変わるそうですよ。どんなものかは分かりませんが・・」

それほど外部にも漏らさないってことは余程重要な試験なんだろう。

サバイバル演習を突破した下忍の先輩たちにも口外無用ってきつたり言われているようだし・・

すごい警戒心の高さが伺える。まあ逆にいえば簡単に情報を漏らす



ような里は

簡単に他国に侵略されてしまうからある意味当然のことなのである。

それから5分程過ぎてソウマと2人で話し合っていた頃・・・

手にタイマーを持った私達の担当上忍白鷺ヒナミ先生がやってきた。

見ると時間キツカリである。後で聞いた話なのだがナルト君の班の担当上忍「はたけ カカシ」先生は  
かなり時間にルーズらしい。

「皆、おはよう。」

「おはようございます。」

気持ちのいい挨拶とはなっていない逆に声が小さかった。

「だいぶもう緊張しているようね。でも緊張しているようじゃこの試験はうからないわよ。」

だからその余分な一言が逆に重圧となって私達に降りかかってくる。  
これも一種の心理作戦か？

「っじゃ12時タイマーをセットしてっ・・・」

今はちょうど午前8時であるから試験時間は4時間ってところか・・・

・

「準備OK！サラッと今日のサバイバル演習について説明するね。」  
そついうとヒナミ先生はポケットに入れてあった二つのスズを取り出した。

私達は異様な目でそのスズを見つめた。

「そつ今日の演習はこのスズを私から奪いとること、もし昼までに

スズを奪えなかった奴は

昼飯ぬき&アカデミーへ戻ってもらうから。そして私がその昼飯をみんなの前で食べるからね。」

昨日先生が朝飯は控えたほうがいいっていったのはこの事だったのか……

早合点した……。

「それとスズは一人一つね。二つしかないから必然的に一人は落ちることになる。だから

スズを取れなかった人は全員容赦なくアカデミーへ戻ってもらうからね。」

え……。なんだって！？どんなに頑張ってもこの三人の中から一人は必ず落ちるってこと？

だとしたらここにいる三人はもはやここでは仲間ではなくライバル……

みんなはこの言葉をきいてどんなことを思っているのだろうか。

「手裏剣、クナイ、忍術なんでも使っていていいよ。私を殺すつもりでこないと捕れないから。」

ソウマが聞き返した。

「危なくないですか？3人相手に……」

ヒナミは待つてましとばかりに余裕の笑顔で答えた。

「何いつてるの。君達はまだ忍びではなく候補生よ。私の心配なんかしてたら合格できないわよ。」

相手は上忍……。能力はケタが違いすぎる。。

「っじゃ説明は以上！準備はいい？」

「ハイ・・・」

余計に小さくなっていた。このとき私達の緊張はピークを迎えていた。

「大丈夫そうね！つじや始め！！！」

スタートの合図が言い終わると同時に3人は四方へ散った。  
運命のサバイバル演習が始まった。

よしっ・・・忍びたるもの基本は隠れるべし・・・みんなうまく隠れられたようね。

ヒナミはあるノートを取り出した。それは合格判定書であった。

まず最初の欄にマルを付け加えた。

ヒナミは付け終わるとすぐさま周りが見えやすい場所へと移動した。逆に3人からは察知しやすくなってしまったがヒナミには考える必要はない事だった。

そして目を閉じ精神を集中させ五感を研ぎ澄ますし瞑想の状態に入った。

三人のチャクラを感じ取る。

その時こちらへ向かってクナイが投げつけられてきた。

咄嗟にポシエットからクナイをだしはじき返す。クナイがきた方向にはうちの小僧・・・

ライガがいた。

「やはり最初に仕掛けてきたのはアナタにようね。ライガ君・・・」  
そういい終わるとライガは思い切り木の幹をけり突撃してきた手にはクナイがしっかりと握られている。

「フンっ！そんなの知ったことないですよ。先生！！」

「随分余裕があるわね。。」

ライガは空中で戦闘態勢にはいり十分間を見計らって手裏剣を投擲した。

しかし無惨にもあっさりと交わされてしまう。

だがライガにはその行動は予測されていた事だった。

その手裏剣の影には起爆札がつけられたクナイが混じっていたのだ。クナイが地面につくと同時に起爆札が爆発する・・・。

ヒナミはこれには不意を付かれたのか瞬身の術で間一髪逃れた。

（影手裏剣の術をクナイに応用したか・・・早くも頭角を現してきたわね。うちはライガ）

地面に着地したライガはすぐさまこちらに向かって駆けはじめた。そしてまた手裏剣を投擲する。

ヒナミはすぐにしゃがみよけた。だがしかし一瞬の隙をライガは見逃さなかった。

ヒナミが後ろに下がった途端瞬身の術で一気に近づきクナイを振り

かざした。

ヒナミも咄嗟にクナイをあてライガの軌道をずらしたがそれもつかの間・・

候補生とは思えぬ身体能力で蹴りに入ってきた。

だがそこは上忍である。冷静な判断で左手で蹴りを受け止めると右手のクナイを捨てパンチをする。

すごいとはいえまだ相手は候補生・・むやみに殺傷することなどできない。

ライガも瞬時に足を離しバックステップでこれを交わした。

「さすが噂に聞いていたけどいきなりこの状態まで持つてくるとは流石ね。」

それだけは認めてあげる。」

「こんなくらいまだまだですよオ先生!!」

話をする暇なくライガはすぐに第二段階へと入っていた。

次に何をするかと思えば・・忍術の印を結び始めていたのである。。

（なっ！あの構えは・・・うちは一族に伝わる印。。まだチャクラ量が足りないはず!!）

そう思ってる暇もなく彼は候補生とは思えぬスピードで印を結び終え・

「火遁・豪火球の術!!!」

ライガの口から放たれた火炎放射はすかさずあたり一体を包み込む。。

一体は焼け野原となった。

ヒナミをとらえられるだけの範囲であった。

だが火が収まるとさっきまでいたハズのヒナミはいなかった。  
あたりを見回したがヒナミの姿はどこにもない・

（クソ！どこに隠れやがった！！）

混乱するライガにヒナミの声ではなく聞きなれた声がライガを導いた。

「ライガ君後ろです！！！」

ライガはすぐに後ろを振り返るとヒナミが拳を突きたて突進をしてきた。

その距離は既に3メートルもなくすぐに行動に移せる段階ではなかった。

殴られるっ！とライガが覚悟した瞬間・

「土遁・土流壁の術！！！」

目の前の土が盛り上がりライガの前に壁をつくった。  
まさに間一髪のことである。

ヒナミの拳は会えなくその壁に遮られた。

そしてライガが横を振り向くとそこにはソウマがいた。

ソウマはどうも今までの戦闘を見ていたらしく付け入る隙がなくて  
ジーツといていたが

ライガの危険を瞬時に読み取り駆けつけたのだ。

「た・・助かったぜ。」

「いえいえ・・同じ仲間ですから助け合つのは当然です！それより一人では

とても太刀打ちできません！！ここは一旦引きましょう！」

これには流石にライガも反論はできずばやくその場を立ち去った。

（いいプレーだったわね。あの行動力・加点対象だわ）

ヒナミは笑顔でまたマルをつけた。

## 第八巻 サバイバル演習その1（後書き）

ようやくここまで到達……

原作どうりのお約束展開です。

サスケと同じ行動パターンですね。

だけど戦闘描写が苦手は作者のやつは全然比べ物になりませんね。

もっと漫画読み直す必要がありますね……。



## 第九卷 サバイバル演習その2

うちはライガside

ヒナミから十分な距離をとるためスピードを増して開始地点まで後退する。

前には先程俺を危機一髪のところまで救ってくれたソウマがいる。横顔を見ると澄まし顔で前を見つめていた。

だが、俺の心の中で一つの疑問がうずまいていた。

（何故・・・俺をあの時助けてくれたのか？）

スズは二つしかなく必ず一人が落ちる・・・。

ここまで来て落ちたいと思ってる奴はいない。みんな忍びになるために必死だ。

表向きは仲間としてもこのサバイバル演習ではライバル・・・

だから俺はこんなところで立ち止まってなんかいられず我先にと一人で仕掛けていった。

無論その時は仲間のことなど考えていなかった。

だが、見せられた現実を上忍との格段の違い。瞬時に場を受け入れ冷静な判断で

俺のトラップを見切りやがった。うちはの奥義火遁・豪火球の術もあっさり交わされた。

あのまま俺がやられていればチャクラはそう残ってなかったし次の行動へ移すのには

時間がかかったであろう。

なのに何で助けてくれたのか？その答えはどんなに考えても見つか

らない。

頭が混乱しそうになりソウマに対する感謝の心が薄れていたため  
思わず聞いてしまった。

「お前・・なんであの時俺を助けた？あのまま俺がやられていれば  
お前達のスズを取れる確立は  
あがっただろうに・・」

突然の質問にソウマは一瞬顔を驚かせたがすぐに冷静な口調で答えた。

「ああ・・その事ですか。最初に言われたサバイバル演習の内容を  
考えてみたんです。

ライガ君が対峙しあつてるときに・・そしたら一つの矛盾が出てきたんですよ。」

・ 「矛盾・・？そんなものがこの演習にあるのか？コレは大事な試験・

生徒達に何か隠している事でも分かったのか？」

思いがけぬ言葉であつた。矛盾とはいったい何のことであろうか。  
ヒナミがいていた説明に怪しい部分などなかったハズだ。

「その話は後です。それよりもまだ時間があります。早く紅蓮に合  
流して作戦を練りましょう。

あの戦闘を紅蓮は見ていたようです。俺達の会話も耳にはいつている  
ことでしょうかから」

|||||||

それから少しして木々に囲まれた中から紅蓮の姿が見えた。

紅蓮は俺たちの姿を見ると安心したような素振りを見せてこっちへ

駆け寄ってきた。

だがその目には涙がうかんでいた。

「私ライガ君とヒナミ先生の戦闘みててレベルが違いすぎるって思ったの。」

みんなのように忍術扱えないし・・私に合格する事は無理って思ったわ。

体術でも差が違いすぎて・・・もう分からなくなって・・・  
しかしソウマが笑顔をみせて歩み寄った。

「そんな事はみんな分かっています。ライガ君でさえ上忍には齒がたたないんですから」

一人で仕掛けたって返り討ちにあうだけなんです。ですが一つだけ話があります。

みんなで合格できる方法が。」

「3人？そんな事あるわけない。最高でも2人までだぞ？」

ライガは顔をしかめていった。確かにスズが二つ・・必然的に一人が落ちることになるわけなのだが。

「違っんです。だから今から話す内容を聞いてくれませんか？それを聞いて納得のいかないようだったらもう何もいいませんので。」  
聞いてみる他に選択肢はない。仲間を信じることもチームワークを形成するのだから。

「分かった。聞いてやるよ。お前に恩もあるしな。」

「私もいいよ。」

2人とも素直に快諾してくれた。

「つでその話とやらを聞かせてくれ。」

そして私達はしゃがんで円を作ってソウマが回りに聞こえない程度の囁き声で説明しはじめた。

「皆さんは最初の段階で相手の心理作戦にハマッていたんです。」

「心理作戦？何のことだ。」

ライガと紅蓮の頭の中にハテナマークが浮かぶ。

「ハイ。一番おかしいと思ったのがスズが二つしかないってことです。」

それっておかしいと思いませんか？」

「おかしいだつて？」

「よく今までのことを考えてください。任務で活躍している下忍の先輩達はどことも担当上忍をいれた

4人1組フォーマンセルで活動しています。ですが担当上忍と下忍2人の

3人1組スリーマンセルはみたことないですよね？」

確かに・・今までみてきた中に3人1組スリーマンセルで活動しているところは見たことがない。

アカデミーで教わった木の葉の条例でも暗部や上忍、中忍での特殊な任務を除いては

下忍には必ず担当上忍を入れて4人1組フォーマンセルで活動しなければならないと決められている。

「ここまで来ればもう分かりましたか？」

ソウマが逆に質問を投げかけた。

するとライガが分かった！というように顔を輝かせた。

流石はアカデミーのルーキー頭の回転は早い。

「なるほどな・・そういう事か。ソウマお前よく考えたな。」

あのライガが関心したようにソウマを見た。

紅蓮にはこの状況がわかっていない。

「ありがとうございます。じゃあ紅蓮に説明しますね。」

「あつ・・うん。ごめんバカで」

「いいんですよ。この目的はスズをとるのではなく3人のチームワークを見るためのテスト

だと思います。」

ライガもうなずいている。一体なんのこと??

「あのスズは仲間割れを起こさせるためのもの、一人でいったつて上忍とは力の差がありすぎて

スズに触るのがやっとです。でも3人で行ってチームワークの良さを見せ付ければ

大丈夫でしょう。」

## 第十巻 サバイバル演習その3

チームワーク・それは基本的に集団で行動する忍び達にとってはなくてはならないもの。チームワークを大切にしなければ自分はおろか仲間

までも危険にさらしかねないことになる。

そう考えてみるとチームワークというものがいかに大切なものかが伺えてくる。

アカデミーでも忍びについていろいろなことを学んできた。

だから、こんなところで仲間割れだとおこしていたら元も子もないのかもしれない。

この班でもし合格できたら・・

ソウマの言っていることは正しいと思う。

だから私達はその考えに賛同をした。

「そうと考えると次は作戦ですね。どうしましょうか・・・」

作戦となるといろんなパターンを練る必要になる・・・

無論私にはそんな事考えられる頭は無い。

だが作戦を練るのにさほど時間はかからなかった。

すでにライガの中では具体的な構想が出来上がっていたらしいから・

「俺にいい案がある・・・」

「おっ流石ライガ君。聞かせてくださいませんか？」

二人ともライガに耳を傾ける。

「それはだな……」

ライガが淡々と次から次へと話していく。

そしてその話し合いと合わせて・・・私は自分の秘密を喋ってしまった。

晶遁のことについて・・・

二人ははじめ啞然としたが、すぐに私のことを受け入れてくれた。  
二人ともありがとう……。

||||||||||||||||

今・・・私はライガの作戦を遂行すべく先生のもとへと向かっている。  
体術に一番自信があるといわれた私はなんと斬り込みを任された。  
私の仕事は体術で相手の気を引かせてライガ達の後方支援班に繋げることである。

残りの二人はそれぞれの配置へ既に向かっている。

後は私が見計らって最初にしかければいい。

しばらくするとライガ君とヒナミ先生が対峙しあっていた開けている場所に

ヒナミ先生は本をだし休息にひたっていた。

私はその姿をみると十分に間合いをとって後ろへと回る。

あの状況からしてまだ私の姿には気づいていない。  
よしよし、上出来だ。

無事木々に身を隠しながら絶好の場所に陣取った。

ここなら後ろをとりやすくもってこいの場所だろう。

あたりを見回すと二人も無事きづかれずにそれぞれの配置へついたようだ。

私は目をこらしこの作戦の指揮をするライガへ向かってOKサインをだした。

ライガは腕を上から下に振るジェスチャーがかえってきた。

おそらくGOサインだろう・・・私はまらOKサインをだして・・・  
ポシエットからまず手裏剣を取り出す。

手裏剣を握る私の手は小刻みに震えている。

緊張している・・・でも今までだってこいつう窮地はだっしてきた。

もう一度気持ちを高く持つて深呼吸をする。

すると少し緊張がほぐれた。

そして手裏剣をしつかりと握り締め・・・

ヒナミ先生へ狙いを定める。大丈夫・ゆっくり集中すればできる。  
次の瞬間私は手裏剣をヒナミ先生へと投擲した。

うまく軌道にのってヒナミ先生の後ろをついている。



だがしかし、そこは上忍というもの・・・すぐに身の危険を察知してクナイを持ちはじき返した。

それと同時に私は木の幹を思い切り蹴ってヒナミ先生へ突撃を開始する。

「今度はあなたね。いいわ相手してあげる。」

互いにクナイで応戦する。

上忍の体術はスピードは速く威力もある。だけど私だって負けていない。

なんとか相手のクナイに食らいついて対処をする。

カキン、カキン・・・

金属音がこの広大な演習場に響く・・・。

「私の動きについてこられるとは中々のものね。」

「いえいえ、私はまだまだです！」

褒めの言葉を聞いたのは嬉しいが今の状況では素直に喜べない。

このまま至近距離でクナイで戦いあっていたのでは落ちがあかないので

私は第二段階へはいった。

先生が真横から振りかざしてきたクナイを刃をあてるのではなくギリギリでよけると

守りの浅い足元へ一発まわし蹴りをした。

先生はまたもや冷静な判断でバックステップで私の蹴りをかわし後ろへ着地しようとする。

だが・・・それは作戦通りであった。

ヒナミが着地した瞬間・・・

「土遁・心中斬首の術！！！」

突如真下の地面からソウマの手がでてきてヒナミの脚を掴み

一気にヒナミを土中へと引き込む・・・

一瞬不意を突かれたヒナミはよろめいたが・

「その程度じゃまだまだね。変わり身の術！」

ヒナミの体は瞬時に木の太い幹へと変っていた。

「クソッ・・・」ソウマは舌打ちをついた。

私も急いでソウマのもとへ駆けつけ土中からでようとしているソウマに手を貸した。

それについてライガも私達のもとへやってきた。

「二人ともよく動いてたぜ。」

「まだまだよ。」

「俺も肝心なところで失敗してしまいました。」

「でもここでへこたれてる暇はないぜ・・・。次がラストプレイだな。」

「分かった。」

「ハイ。」

3人で待っていると・・・ヒナミがどこからともなく目の前に現れた。

「あなた達・・・よく考えているわ。すでにアカデミー生ではないくらいにね。」

でももう時間がない・・・このままだと全員アカデミーに戻ってもらうわ。」

ヒナミはまたもや揺さぶりをかけてきた。

だがもはやそれにつかる私達は既にいない。逆に自信満々である。

（どうやら・・・この試験の本当の目的を分かり始めてきたようね。

あの連鎖も

十分だったし。仲間意識もしっかりとなっているわ。）

## 第十一巻 サバイバル演習その4（前書き）

ソウマにとあるチートフラグ発生・・かも・・  
既に2回ほど技を使っていますがまだまだ下忍にしては  
余裕がある設定になっております。

## 第十一巻 サバイバル演習その4

今までにも十分上忍との力の差はしらしめされてきた。

さっきの戦法だってそう・・うまい具合に絶妙のタイミングでかわされてしまった。

もし私だったらよける時間すら考えられず足をつかまれて晒し首になったであろう。

私達はもう一度木々の中に隠れ最後の作戦となろう戦法を練った。

ライガは既に別の案も考えていたらしく・・話はすぐにまとまった。

「これでラストチャンスだ。時間がない。何が何でもスズをとるぞ。」

その言葉からは・・最初にあった頃と威圧感というものは消えており逆にライガの仲間思いが感じられた。

68

「俺が今度は仕掛け役になる。紅蓮は俺の補佐として一緒についてきてくれ。」

ソウマはさっきと同じで・・土中に潜り合間をみて心中斬首の術を頼む。」

「だけど・・また変わり身の術やなんかで・・かわされてしまうんじゃない。」

「大丈夫だ。おいちよつと耳をかせ・・」

そう言われてソウマはライガに耳をかした。

あまりに小さい声なので私には聞こえなかった。

そしてライガが耳を話すとソウマは顔を驚かせてなるほどいう  
関心した態度を見せた。

「え・・何々？」

私も思わずしりたくなって聞き返したがソウマは後になれば分かる  
といって

教えてくれなかった。

ソウマは一人準備のため消えていってしまった。

私はライガのサポート役として手裏剣などの投擲をすることとなった  
ライガも一応クナイはもっているが何をするかは分からない。

そして・・私達はもう一度ヒナミ先生のところへ向かった。

先生は今度は場所を変えて西に向かっているとのことだった。

途中木の幹をつたっている私たちに背後から一人近づいてくる者が  
いた。

「ライガ君・・後ろから誰か近づいてきてるような気配がするんだ  
けど。」

誰かな？」

無論先生ではない誰か

「近づいてくればわかる。大丈夫敵ではない。」

またもや詳しいことは聞けなかった。

仕方なく・・待っていると驚いた。

「え……ソウマは確か別行動なんじゃ。」

「あいつはソウマの分身体だ。本物のソウマはあっちにいる。」

今回の作戦はあたかも3人で突撃してくると見せかけ、隙がいたところを

だからって先に教えてくればよかったのに・・後で見れば分かる  
とは

結局ライガと私、そしてソウマの砂分身体を引き連れて向かうことになった。

[illegible]

先程から彼らのプレーには驚くものが沢山ある。

ライガがどうやら陣頭にたって指揮しているらしい。

ドベである紅蓮もあの位の体術技量があれば対等に戦える。

70

最初は予想通り一人でつかかってきたが今ではチームワークを率先して

唱えているんだろう。

初めて担当する班員にしては中々おもしろい班になるかもしれない・。

そう思っている間にも彼らが近づいてきている。

人数は足音からして3人・・・か・。

まだ彼らの姿は見えないがすぐに北の方向からクナイと手裏剣のおりまざって

投擲されてきた。

このくらいの量なら上忍にしてはまだまだ序の口程度である。わきめもふらぬ速さで一本のくないですべてをはじき返した。

すぐに彼らの姿が見えてきた。どうやら紅蓮とソウマがサポート役にまわっており

ライガを援護しているらしい。

まもなく第二陣がやってきた紅蓮が手裏剣・・・ソウマがクナイを投げてくる。

しかし・・・ヒナミにはそれは囿でライガがはじき返しているうちを見計らって

瞬身の術で一気に近づき体術戦にもってくるというパターンを思い描いていた。

だがそれは違ったのである。印を結ぶないなやライガは思いもよら



ぬ術をだしてきた・・・

「忍法・・・手裏剣影分身の術！」

忍術レベルでもAランクに位置する・・・高等忍術・・・

放たれた手裏剣は分身を繰り返しやがて多数の手裏剣へと変った。  
そして第二陣と混じって更に多数のクナイ、手裏剣がこちらへ向かってきている。

「っな・・・あんな術まで・・・使えらとわ・・・やはり想像以上に何かをもっている。」

（あの数はさすがに防ぎきれてもその間にやられるだけね。この子達相手に忍術は使いたくなかったけどしょうがない・・・使わざるをえない。）

ヒナミはすべての印を結び追え・・・忍術を出した。

「水遁・水陣壁の術！」

ヒナミの前にあらわれた水の壁が現れ無惨にクナイ、手裏剣は一瞬にはじきかえされてしまった。

そして予想通りにライガがこちらに向かって突進してくる。

その目には・・・写輪眼が宿っていた。

こんなところで・・・高等忍術を見せられて更に写輪眼とは・・・

ヒナミは瞬身の術で合間を見ようとしたが体術・幻術・忍術をすべてを見抜く

写輪眼の前では動きが事前に察知されてしまう。

そのため先周りされてしまった。

既にクナイがかまえている。

有無をいわさず・そのまま体術戦へ・・・

だが・少々危険が伴う・写輪眼の前では次の行動が読み取られてしまう。

ヒナミにも初体験のことであった。

なんとということか・上忍が下忍相手におされている。

ライガはきちんとヒナミの急所を狙って来ている。

ヒナミはそれを防ぐのに手一杯であった。さらに・後ろから紅蓮達の

クナイが更に飛んできている。

ライガの一撃を間一髪で交わしヒナミは即座に忍術を使った。候補生相手といえどここまでされてしまったらとんでもない。今ここで瞬身の術を使っても先回りされてしまう。

「紅蓮・交わせ!!!」

ライガがすかさず叫んだ。

「写輪眼相手とは言え・ごめんなさいね。水遁・水球弾の術!!!」  
本来よりかは抑え目であるが・十分威力はある。

ライガのそこまでは予想していなかったであろう。  
踏み込んでおり身動きが取れないでいた。

だがまたもやライガ達の目の前の土が盛り上がった。

「土遁・土流壁の術！」

水球は土の壁と衝突し・・・両者とも崩れ去った。  
そして土中より・・・ソウマの姿が現れた。

後ろにいたはずのソウマはその瞬間とかれ砂へと帰った。

あちらに気を引かせて・またもや心中斬首へもっていきこうという  
作戦だったが

仲間の危険を目の前にして出てきたという魂胆であった。

「先生・・・一步間違えたら危なかったですよ！」

「ごめんなさいね・・・。写輪眼相手に戦うのは初めてだったものだから

本気になってしまったわ。だけど土の中にあなたがいた事は分かっていた。

危険になったらまた出てくるんだろうってのは分かっていたわ。」

「気づかれてたんですね。それであのタイミングであの術を・・・」

「怪我はさせたくない・・・。せめてもの配慮よ。」

とわいつてもヒナミ自身も相当追い込まれていた。

分かっていたとしてもあのタイミングでなければやられていた。

そしてライガは写輪眼を解いて紅蓮とともにやってきた。

「写輪眼・・・あまり使いたくなかったのですが。スズを本気でとるため

使ってしまいました。」

「何いつているの。殺すつもりでこいつていつたのは私よ。別に気にしてはいないわ。」

そして・

[illegible]

試験終了を告げるタイマーが鳴った。

そしてヒナミは笑いながら

「おめでとう。あなた達は合格よ！」

だが彼ら3人は既に本当の目的を分かっていた。

「あら・既に気づかれてたか。まああの連携をみれば分かってたわ。」

一瞬の沈黙を挟んで紅蓮が言葉をだした。

「やっぱソウマのいったとおりだったね。」

「ああ、そうだな。」

どつと笑いがこぼれた。みんな心の底から笑っている。

私も忍びになった喜びがふつふつとわいて来た。

「あ・あみんな明日から早速本当の任務をやってもらうわ。木の葉任務受理所の前で待っていてね！これで私はドロソ！」

といってすぐにヒナミ先生はいつてしまった。

。喜びはまだ続いた。

「ライガ君はやっぱりすごいや・・・。」

「俺の力だけじゃない。お前らの頑張りもだ。」

「そうね。3人で勝ち取った「合格」だね。」

いつまでも感嘆の声は・・・演習場に響いていた。

## 第十二巻 忍びとなって

難関といわれたサバイバル演習を突破し晴れて忍びとなった

うちはライガ、鳶松ソウマ、夕凧紅蓮の所属する第十一班は担当上忍の白鷺ヒナミの元

忍びとしての活動をスタートさせていた。

最初の内は下忍レベルであるDランク任務が主であった。

その内容は迷子の猫の搜索から子守、清掃など木の葉の住民からよせられた

依頼が多い。なので実際に敵と戦うことなんていうのは無い。

忍びとなったばかりの下忍には面倒くさい事だと思われガチであるがいきなり忍びになった子達を常に危険がつきまといっている里外には出せないのである。

まだ仲間意識も浅く実戦経験も少ないためだ。

Dランクで下積みさせるのは任務の重さを体感させるためでもある。だがDランクや班での修行の状況を見て担当上忍の承認のもとでCランク任務

つまり中忍レベルの任務を請け負う事もできた。

CランクはDランクとは違い里外からの任務もある。

多少危険は伴うが貴重な実戦経験となる。

忍びとなつて早一ヶ月の月日が流れた。アカデミーとは違い早朝から任務にでて夜遅くに帰る毎日である。

おかげで筋肉痛に苦しんでいたわけなのだが・

朝に弱かった私は最初のうちは度々待ち合わせ時間に遅れてしまい怒られることもしばしばあったが一ヶ月もたつと大分慣れた。最近では重労働の任務が多いいたため体のあちこちが痛い。

普段使っていない筋肉を使うトレーニングの意味合いもこめられていたようだが

任務を無事終わらせることが一番の目的であつてそんな事は全然考えている暇はなかった。

まあそのおかげで体力がついてきて体術に磨きがかかってきたのでよかった。

また今日も朝6：00集合であつた。朝早くに家を出てまた眠りから覚めぬ

木の葉の町を歩く。

日中や夜は活気にあふれている木の葉の大通りは人もまだまばらで開いている店は一、二軒程である。

しばらく中心街を歩いていると炎をイメージした赤い服を着て額あてをしている

子にあった。そうその子は紛れもなく私と一緒に第十一班に所属し土遁を得意としている

鳶松ソウマであった。

服はあの色しかないのか一発で分かった。

私が駆け足で近づいていくとその足音で向こうも気づいたのかこちらを振り返った。

「おはよう。」

「あつ紅蓮おはよう。」

「活動の時以外であうのは初めてだね。」

「ああ・・・そういえばそうだね。」

それはいつも私が待ち合わせ場所に行くとライガとソウマの二人は対外先に来ていた。

私の家が一番遠いからっていうのもあるが一番は朝に弱いことと女の子が故に寝ぐせ直しなどを入念にやってしまっただけで遅くなってしまうからかな。

ともあれ、今日もいつもどおりに出てきたのだがソウマがこの時間にいるって事は

ソウマの少しばかり今日は遅くで来たんだろう。

ただ理由はあえて聞かないことにした。

「ところでさ、ソウマの家はこの辺なの?」



「そうだよ。だって僕の家はお父さんが武器屋やっているから商店街のすぐ近くなんだ。」

「えっ。ソウマの家って武器屋だったんだ。」

「ハイ。お父さんの作る忍具は木の葉でも有名だからね。質が良いって評判なんだよ。」

へえ、初めて知った。ソウマの家が武器屋だったなんて・・ソウマの父鳶松ナリマさんは木の葉でも有名な土遁使いとして有名である。

今は引退して隠居していると聞いてたが武器屋を開いて鍛冶士になっていたとはオドロキである。

「あつ今度お父さんに頼んで作ってもらいましょうか？同じ班員だったら多分

喜んで作ってくれると思います。」

「でもいいの？逆に迷惑なんじゃない？」

「いえいえ、そんな事は全然ないよ。」

確かに・・私の今の忍具は切れ味がちよつと落ちてきていた。

そろそろ買え時と思っていたところだがわざわざ私のために作ってもらうのは

いささか遠慮したいものであったがソウマの好意を踏みにじるのも逆に良くないと思って半ば不安はあったが承諾した。

鳶松武器は刃こぼれしにくくて長持ちな上品質が良いため木の葉の忍びは好んで買っているのだ。

その一つも木の葉の忍びの強さになっているかも・・・。

そうこうしている内にいつもの待ち合わせ場所となっている

木の葉の中心街からちょっと離れたところにある公園がもうすぐそこに来ていた。

そこには既にライガの姿があった。

「ねえねえ。ライガってソウマより早く来てるの？」

「うん。いつも僕よりか先に来ています。30分前にきたときも既にいましたし・・・」

「うわ・どんだけ早くきてるんだか。」

「まあ彼らしくていいんじゃないですか。人一倍任務に熱心なのライガだし。」

「それもそうだね。」

やがて公園の前までたどりついた。

「おはよう。」

「おはようライガ君。」

私達の声に気づいたのかライガは後ろを振り向いた。

「ん・お前らか。二人でくるなんて珍しいもんだな。」

「大通りではったりあっちゃってね。」

「そうそう。結構ソウマの事聞けたし。」

「ソウマの事？」

ライガは不思議そうに聞き返してくるもんだから私達が話していたこと一通りいった。

ソウマの家が木の葉で有名な武器屋な事だったことはライガも知らなかったらしい・・・。

### 第十三巻 Cランク任務／波の国へ／序章

こうやって3人で話していると打ち解けていなかった最初の頃の自分が

なんだが恥ずかしく思えてきた。

最初は何でも自分のことを話したがいなかったライガも自然と私達の話にも

のってくれるようになったしソウマはもっと話したがるようになっている。

意外とこの班でならうまくやっていけるかも・・

そう思っていたときに丁度私達にCランク任務の話がヒナミから出てきたのである。

いつものように時間キツカリきたヒナミ・・そこまではよかったのだが

その手元にはなにやらプリントがいったケースを持っていたのである。

挨拶の後ヒナミが早速そのプリントを見ながら詳細を説明した。

「えーと今日から皆にはCランク任務をやってもらうことになった。Dランクの出来やあなた達個人の技能を判断して火影様と話し合っ  
て決まったのよ。」

し・・Cランク任務!?

その言葉を聞いて一瞬驚いた。

他のソウマたちも同じ事を考えてそうだったがソウマはもう一度聞

き返していた。

「Cランク任務って・・・確か中忍レベルじゃないんですか？僕達下忍がやっていいんでしょうか？」

「木の葉の決まりではある一定以上のDランク任務をこなしかつ担当上忍が班員それぞれの技能を判断した上で承認の元受けられることになってるの。勿論近場で簡単な任務だけどあなた達には里外に出てもらう任務よ。その分は私もみんなのバックアップをするから。」

それを聞くと私達の忍びとしての活動が認められた上に労働となっていたDランク任務から開放された気分になれた。だが簡単とはいえ少々危険が伴う・・・少しだけ不安もある。

「みんな納得してくれたようね。それじゃ早速任務について説明するわ。」

今回あなたたちがつける任務は波の国への護衛任務よ。」

「波の国？ですか・・・」

波の国とは初めて聞く国であるどこにあるのかさえ全く分からなかった。

## 第十四卷 く波の国へく第二章（前書き）

波の国の位置が曖昧模糊になっております。  
どなたか知っている方がおりましたらお願いします。

## 第十四巻 波の国へ第二章

私達は担当上忍であるヒナミから波の国について説明を受けた。

波の国・それは木の葉隠れの里、通称火の国より遠く離れた海上の島々にある

隠れ里を持たない小国である。隠れ里を持っていないため忍びという者はなく

影と呼ばれる人物もいない。逆に島国なめ他国から干渉がうけにくく忍びをもつ必要がない  
というのが一番の理由である。

そのため大名が国を統治しているらしいがその大名でさえもお金をもっていないという

貧国だそうだ。依頼をするのにもお金がかかるためお金の無い波の国からの依頼は極端に少なく

また木の葉の忍びも実際に波の国に行くことは滅多にないため火の国での認知度も低いらしい。

一瞬、金がないのなら依頼できないんじゃないの？と思ったがそれより先は大人の事情つてもものがあるので触れないでおいた。

今回の任務地となる波の国の知識もつけたところで私達は早速依頼人のまつ

任務受理所の建物内に入った。

建物の中に入ると受付の者である木の葉ベストを来た男が一人私達

の姿を見ると

事前に心得ていたように近寄ってきた。そしてヒナミに向かって話しかけた。

「ヒナミさんお待ちしておりました。依頼人様はもうそちらの待合室で待機されておられます……。」

「分かったわ。ありがとう。」

受付員はハイと小言で応えたと自分の持ち場へと戻っていった。

私達はそのまますぐ隣の待合室へと通された。

中に入ると依頼人と思われる人物が私達を待っていた。

まだ朝が早いいため同じ待合室の中には私達と依頼人以外は無論いない。

依頼人は顔立ちがすっきりとしていて額には大工さんらしい布を巻いており

目は澄み切った青々としていて歳も私達とかわらないくらいな青年であった。

依頼人は律儀な人で私達を見るなり一礼をした。

いきなりされるものだったから戸惑ったがヒナミが挨拶するので続けて私達も挨拶をした。

その後ヒナミがまず口を開いた。

「こちらが今回の依頼人のウルマさんよ。波の国で大工をされている方なの。」



見た目でもまだ15、6の少年であるがその歳でもう大工として仕事をしているらしい。

「今回依頼させていただいた比良 ウルマです。皆さん波の国までの護衛よろしくお願いします。」

丁寧で落ち着いた口調でウルマはいった。

いざ、依頼人を前にすると緊張のは当然だ。なにせ護衛というのだからこっちは

依頼人の命を預かっているということになる。見ると三人とも顔がひきつっていた。

心臓はバクバクである。

そんな3人を見て諭すようにヒナミが言った。

「いえいえ、この子達も里外の任務は初めてですので緊張している部分もありますが

技能は他の同年代の忍びより秀でていますのでご安心ください。」

「そうなんですか。それは助かります。」

ウルマはそれを聞いて安心したように胸をなでおろしたがライガ、ソウマ、紅蓮の三人は

依然打ち解けてないでいた。

その後10分ほどヒナミが任務について簡単な質問をした後最後に私達3人に向かって言い放った。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だから。緊張していると行動に支障をきたすことになるし

動揺を生むことになる事はアカデミーでもう学習済でしょ。

そうと決まればすぐに荷造りをしてきてちょうだい。15分後木の葉の正門前に集合ね。」

そうつい終えるとヒナミはウルマとともに去って行ってしまった。残された私達は一路それぞれの家へと戻ることになった。

戻る途中にライガが話し掛けてきた。ライガは一はやく現実を受け入れ

私達を和ますかのような口調で言ってきた。

「いきなりあんな事いわれたんじゃたまったもん無いけどこれもまた忍びとしての任務だし絶対こなしてみせような。」

その言葉を聞いて今までの不安が少しずつ和らいでいった。

「ハイツ」

「そうね。」

またいつもの3人に戻っていた。「緊張しては何も始まらない」

・

アカデミーでくどいほどいていたイルカ先生の言葉が脳裏をよぎった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8612s/>

---

NARUTO～一葉の忍者～

2011年7月14日01時54分発行